

JOHAニューズレター

第33号

日本オーラル・ヒストリー学会第15回大会 (JOHA15) 報告特集

2017年9月2日(土)、3日(日)の2日間、日本オーラル・ヒストリー学会第15回大会(JOHA15)が、近畿大学東大阪キャンパスにおいて開催されました。分科会3つと研究実践交流会、テーマセッション、シンポジウムがそれぞれ1つずつ開かれ、活発な討議が繰り広げられました。

今回のニューズレターでは、会員みなさまに、このJOHA15のご報告をするとともに、3月17日のシンポジウムと、3月末締切の学会誌14号の原稿募集についてお知らせします。また、第16回大会の日程は2018年9月1日と2日、会場は東京家政大学板橋キャンパスです。プログラムの詳細は未定ですが、自由報告の分科会も予定しています。エントリー募集などについては、改めてメーリングリストや学会HP上でお知らせいたします。

【目次】

I. 日本オーラル・ヒストリー学会

第15回大会報告・・・・・・・・・・2

1. 大会を終えて
2. 第1分科会
3. 第2分科会
4. 研究実践交流会「世代をつなぐ聞き取り
～オーラル・ヒストリーの可能性～」
5. 第3分科会
6. 第4分科会: テーマセッション「再び〈戦争の子ども〉を考える」
7. シンポジウム「戦争経験の継承とオーラルヒストリー—体験の非共有性はいかに乗り越えられるか—」

II. 総会報告・・・・・・・・・・8

2017年度事業報告・決算報告・会計監査報告、
2017年度事業報告・予算案、理事選挙結果報告ほか

III. 理事会報告・・・・・・・・・・12

1. 第七期、第八期合同理事会 (2017.9.2)
2. 第八期第二回理事会 (2017.12.3)

IV. お知らせ・・・・・・・・・・17

1. シンポジウム「オーラルヒストリーのアーカイブ化を目指して」開催のお知らせ
2. 『日本オーラル・ヒストリー研究』
第14号原稿募集
3. 会員異動
4. 2017年度会費納入のお願い

.....
*ニューズレター掲載のメールアドレスは、(at)部分を@に替えて送信してください。

日本オーラル・ヒストリー学会
Japan Oral History Association (JOHA)

I. 日本オーラル・ヒストリー学会 第15回大会報告

1. 大会を終えて

今回は大阪と言いながら、やや不便な近畿大学までお越しくださりありがとうございます。夏休み中の開催ということもあり、お越しくださった皆様にはご不自由をおかけした場面が少なからずあったかと思えます。そんななか、地方開催でありながら、のべ93名（一日目だけでも76名）の参加者があり、懇親会にも52名もの方々が残って下さいました。

幅広く自由な論題をとりあげるJOHAならではの研究を集めた大会を開催できたことは、JOHAを初めて知ったという本学の教員や院生にとっても刺激的な二日間となりました。今回開催実施の中心で動いておりました文化・歴史学科はジェンダー研究や民俗学といったJOHAと親和性の高い研究をはぐくんでおります。今回のご縁を大切に本学科としても活動の幅を広げていければと思っております。

最後に、大阪大学・上智大学をはじめとして多くの院生の方々や事務局の皆様にお手伝いいただき、無事に会を終えることができました。心より感謝申し上げます。

（第15回大会開催校理事・上田貴子）

2. 第1分科会

第1分科会では、聞き取りをもとに語り手の人生を描きだそうとする報告、および語り手とのやりとりを振り返りながら語りを理解するとはどういうことか検討する報告が行われた。開始時間になっても報告者が全員揃わず混乱する場面もあったが、議論は活発に行われた。

第1報告の松平けあき（上智大学）「アメリカの歴史的変遷におけるある「日系アメリカ人女性」の経験ーハワイ・日本・アメリカの移動経験から」は、ハワイ日系二世のある女性のライフヒストリーをもとに、アメリカのマクロな歴史的変遷のなかで、ミクロな個人がどう生き抜いてきたのか明らかにしようとするものである。報告では第二次大戦や公民権運動といった歴史的変遷のなかで、この女性がハワイ・日本・アメリカという複数の社会を移動した経験から「日系」「アメリカ市民」「女性」であることの意識をどのように構築／再構築していったのか、そのプロセスを検討した。

第2報告の坂田勝彦（東日本国際大学）「炭鉱の閉山をめぐるもう一つのリアリティーー元炭鉱職員のライフヒストリーから」は、杵島炭鉱（佐賀県杵島郡）の元職員のライフヒストリーをもとに、かれらが炭鉱閉山という出来事をどのように経験したのか、また、閉山後にどのような人生を歩んだのか描こうとするものである。語り手たちは鉱員たちを閉山後も守るために奔走した人々であり、かれらはその経験を「後始末」や「終戦」と表現する。報告ではこうした語りを手がかりに、地下労働を担った鉱員たちとはまた異なる炭鉱閉山をめぐるリアリティを探った。

第3報告の三田牧（神戸学院大学）「「聴く」から「伝わる」への転換ーある南洋帰還者とのやり取りの軌跡から」は、話者にとって語りがもつ意味をいかにしてつかむことができるのか、ある南洋帰還者との長年にわたる交流の軌跡を辿ることを通して考察するものである。報告者は長らく彼女の語りを「セピア色の情景」としてしか聞けなかったが、あるとき語りの意味が了解されて「フルカラー」に変化した。報告では語り手との数々のエピソードを出会いから別れに至るまで時系列的に紹介し、その瞬間がどのようにして訪れたのかを明らかにした。

第4報告の加藤里織（神奈川大学）「戦後ブラジル移住について—奄美大島出身の二人のコチア青年移民のライフヒストリーから」は、青年時代にコチア移民を経験した奄美大島出身の男性のライフヒストリーを取り上げたものである。奄美大島出身のブラジル移民を扱った研究は少なく、その全体像は十分に明らかにされていないことから、本報告ではブラジル奄美移民とはだれのことを指すのか、戦後ブラジルではどのような生活を営んでいたのかなど、移住から現地定着に至るプロセスを明らかにした。

（石川良子・佐藤量）

3. 第2分科会

本分科会では、H I V陽性者当事者のACT UP、米国大統領選におけるCM制作者への聞き取り、社会派ドキュメンタリストへのインタビュー、戦時性暴力被害者証言をめぐる方法論的検討など4つの報告がなされた。第1報告「日本におけるACT UP—性感染H I V陽性者当事者と協力者はいかに協働して生存とパンデミックに対応してきたか」大島岳（一橋大学）。日本において薬害H I V感染被害者をめぐる研究蓄積はある。しかし他方で性感染H I V陽性者をめぐる研究は少ない。本報告では重層的なスティグマを烙印し続けられてきた性感染H I V陽性者当事者と協力者がいかにして生存を模索し困難な状況を乗り越え、パンデミックを阻止しようとしてきたのかという問題関心の元、ゲイ雑誌で当時H I V関連情報や陽性者がどのように語られていたのかが解説され、そこに隠された運動の契機が確実に存在したことが主張された。

第2報告「聞き書き調査で読み解いた米国大統領選—1964年のTVCM “Daisy” を事例として」片山淳（東京経済大学）。1964年米大統領選挙に大きく影響を与えたTVCM “Daisy” の制作者へのインタビューをもとにした報告。著名な制作者であるので、インタビューだけでなく他の多くの資料をもとにした報告があれば、もっと印象深くなったはずだ。

第3報告「テレビの社会派ドキュメンタリーはいかに制作されたか？—伊東英明氏が手がけたシリーズ『X年後』（南海放送）を事例に」西村秀樹（近畿大学）・小黒純（同志社大学）。報告者たちは優れたテレビドキュメンタリーの成立および制作過程を調べる研究を続けているが、その一環として伊東英明氏（南海放送ディレクター）に対する聞き取りを実施した。具体的には2012年に民間放送連盟賞を受賞した作品『放射能を浴びたX年後』がどのようなきっかけで制作を思い至り、具体的な制作過程などの語りの解説が試みられた。一連の研究は証言記録としても異議深い、もう少し時間があれば、得られた語りのより深い読み解きを聞いてみたいという思いがわいてきた。

第4報告「戦時性暴力被害者証言の信頼性・重要性と、検証の方法論」井上愛美（韓国国民大学）。日本軍「慰安婦」問題は、文書資料が発見されていないという理由で日本政府はその強制性を否定し続けているが、実際に慰安婦とされた当事者の証言は多く存在している。報告者はその証言の信頼性や検証をめぐる先行研究を整理したうえで、「慰安婦」被害者証言をはじめとするオーラル・ヒストリーの信頼性の問題に答えるために、検証の方法についてさらなる研究の必要性を主張した。確かに重要な指摘であるが、オーラルなものの検証は客観的な文書資料の検証とは異次元の営みであり、文書資料と同じ形で「検証」すべきという主張自体に孕まれた政治的な問題性などをもっと追求すべきというフロアのコメントが印象深いものだった。

（好井裕明）

4. 研究実践交流会「世代をつなぐ聞き取り～オーラル・ヒストリーの可能性～」

今大会では大会開催校企画として、社会学・歴史学・民俗学の研究実践から得られた知見をシェアし議論する場として研究実践交流会を実施した。テーマに「世代」をキーワードとしていたのは、聞き取りという作業においては世代が意識される場面が多いという点が登壇者の中で共有されたためである。

第1報告「ライフストーリー・インタビューの経験を作品化する」は、長崎の被爆者であり語り部をしている方々へのインタビューをもとに『〈被爆者〉になる—変容する「わたし」のライフストーリー・インタビュー』（せりか書房、2016年）を上梓された高山真氏（慶應義塾大学）による。報告では「聞き取り」の現場で出あった「語りえなさ」に注目し、「語りえない体験を言葉や身体により表現する」人々とのライフストーリー・インタビューの経験を紹介し、体験していないことを理解する難しさを改めてフロアに訴えた。

第2報告「沖縄に暮らす南洋群島引揚者の証言集を発刊して」は、『日本統治下南洋群島に暮らした沖縄移民—いま、ひとびとの経験と声に学ぶ—』（新月社、2013年）『複数の旋律を聞く—沖縄・南洋群島に生きたひとびとの声と生—』（新月社、2016年）として聞き書き集を精力的にまとめている森亜紀子氏（同志社大学）による。歴史学というディシプリンに立脚した論文化の作業とは別に、聞いた話をそのままの形で残そうという努力のなかで、新たに見えてきたオーラル・ヒストリーがもつ可能性を提示した。

第3報告「民俗学の聞き取り調査—民俗文化の記憶・体験を残すところみ—」は、『熊野川町史』（新宮市）『高野町史』（高野町）など和歌山での聞き取り調査をもとに市町村史編纂に関わってきた藤井弘章氏（近畿大学）による。より古い民俗を聞こうとするだけではなく、歴史民俗と現代民俗を橋渡しする必要があることを指摘し、大学生を聞き取りに巻き込んでいく可能性を語った。

フロアとの間では聞き取りの技術的な問題、インフォーマントをどうやって見つけるのかという話や、聞いた内容をどう残すかについても意見が交わされた。沖縄をめぐる聞き取りを例にとり1970年代と2000年代とでは語り口も語られる話も違うことが指摘され、聞き取りの場がいつ語られ・聞かれたか、その聞く場がどういうものかに違いがあること、そしてそれによって語りの質が変わることが共有された。

世代という点では、複数のインフォーマントの間にも世代の違いがあり、古い話をしてくれる年配の方であればあるほど、聞き取りを始めたばかりの聞き手は価値を見出しがちである。だが世代が違う方の話を聞くことで見えてくるものがあり、より若い世代の語る内容にある、言葉にならない経験にもとづくもの、生活の中にあるものも含めてすくいあげる意義があることが三者三様に指摘された。

最後に、聞き取りが自分の学問のディシプリンとどう関係するのか、という点を三人に質問した。これに対し、聞くことが先にありそれが社会学として形をなしていったというのが高山氏の立場で、民俗学は何でもききたいという姿勢から入るが、自分もそうであったというのが藤井氏の発言であった。聞き取りを論文に使うことがまだまだ少ない歴史学を出発点とする森氏は、「聞く耳」がかわる」という感覚があったことを指摘され、この転換によって他のディシプリンの人とも話せるようになったとのことだった。この言葉にあるように、それぞれのディシプリンから半歩踏み出すような試みが今後のオーラル・ヒストリーの可能性を広げることにつながることを実感した企画となった。

（上田貴子）

5. 第3分科会

第3分科会では、オーラルヒストリーという共通の枠組みで、多様な発表が行われた。

第1報告の伊吹唯（上智大学）「生き抜くための『多文化共生』—当事者支援者の経験から」は、ある中国帰国者二世の女性のライフストーリーを聞きとり、「多文化共生」という概念を問い直すことを目的とした発表であった。当事者による「多文化共生」支援では、日本語や日本の習慣、文化を取得することは日本で生活していくための「ツール」に過ぎないということを前提として、「同化的」な日本だからこそ、その中で上手く暮らしていくための戦略としての「多文化共生」の形を求めるべきことが重要ではないかと指摘した。

第2報告の安徳慧一（一橋大学）の「ライフヒストリーにおける学校経験の位置—公立男女別学校出身者への調査から」は、公立男女別学校同窓会の女性役員へのインタビュー調査から、当時の学校が持っていた「良妻賢母」への反論した弁論大会の経験、結婚に際しての父親の結婚への期待への反発、結婚後の育児における「空白の時代」を経験の「孤独」を経験した後、同窓会に参加したライフコースの経験について分析を試みた。現在の同窓会役員としての活動を通して振り返った語りから、女性としての複線的な学校経験が再構築され、その経験がどのように個人と関わっているが理解できるのではないかと指摘した。

第3報告の中原逸郎（京都楓錦会）「はんなり世界—京都北野上七軒花街の衣食住に関する聴き取りを中心に—」は長年京都の花街をさまざまな側面から研究している報告者が、今回の報告では、外部者からは見えない実際の花街の生活像を衣食住中心にとらえて紹介したものであった。花街の服装、花街で提供される仕出しの内容、さらに、「隠し部屋」などが存在することも花街ならの居住などが、写真やイラストによって描写された発表であった。そのような花街の独特な文化は日本の歴史的変化と有機的に関係しているとも指摘された。

第4報告の椛本歩美（国際教養大学）「農家を継ぐ女性たち—農家民宿経営者の多世代ライフストーリー—」は、秋田県仙北氏で農民民宿を営む女性たちが、どのように農家としての生き方を模索し、切り拓いているのかをライフストーリー・インタビューを通して解明しようとしたものであった。祖母・母親世代、娘・孫娘世代の多世代が関わる二つの農家民宿について描写し世代間の比較を行い、農家として生きる上での継承と切断について報告した。農家民宿は、女性が農村で生きるための選択肢であり、家族関係を継承する、家庭内での役割分担と協力が必要とされるものである。今、その農家民宿の継承と変化が課題となっていると指摘した。

以上、多様なテーマが混在した分科会であったので、理論的テーマを展開することはなかった。しかし、それぞれの報告者がライフストーリーという手法を用いて描きだした世界は独特で興味深いものであったので、さまざまな質問が活発に行われた。

（塚田守）

6. 第4分科会 テーマセッション「再び〈戦争の子ども〉を考える」

本セッションは、2007年度～2011年度にかけて、甲南大学人間科学研究所が実施した〈戦争の子ども〉プロジェクトをふりかえり、成果と課題を共有するとともに、今後の研究の進展にむけて議論を深めることを目的に企画された。

テーマセッションは、大門正克氏（横浜国立大学）の司会・進行によってすすめられた。まず、人見

佐知子（岐阜大学）から本企画の趣旨について説明があった。〈戦争の子ども〉プロジェクトの特徴のひとつは、心理学と歴史学の専門家による協働のプロジェクトであり、協働のあり方が模索された点あげられる。そこで本セッションは、心理学と歴史学のそれぞれの立場で〈戦争の子ども〉プロジェクトに参加した森茂起（甲南大学）と人見がプロジェクトを再考する2本の報告を準備した。

森報告「戦争体験の聞き取りにおけるトラウマ記憶の扱い——歴史学と心理学の協働の試み」は、研究で得たナラティブの具体例を提示しながら、心理療法で扱うナラティブをどう理解するかという問題を中心に論じた。また、エピソードのディテールを理解するために歴史的事実・背景の考察が重要であること、トラウマに焦点化することで証言をさまたげるものの心理学的な考察にくわえて、記録にとどめられない歴史的事象への理解が深まる可能性についても論じた。

人見報告「〈戦争の子ども〉からオーラル・ヒストリーを考える」は、〈戦争の子ども〉プロジェクトを振り返りつつ、〈戦争の子ども〉プロジェクトが歴史学に投げかけた問題として、口述資料をめぐる史料批判の問題と、歴史叙述をめぐる課題について論じた。

以上、2本の報告ののち、倉敷伸子氏（四国学院大学）・中村英代（日本大学）によるコメントがなされた。「心理学からの球を受け取る」と題された倉敷コメントは、歴史学の立場から、出来事の体系化・普遍化という不可避的な要求をもつ歴史学という学問の特質を、〈戦争の子ども〉という心理学との協働の経験によって相対化しつつ、戦後の経験をふくめて個人の体験を理解することの意味、当事者の主観にそくして歴史をみる方法を議論する必要性などについて問題を提起した。中村氏は社会学の立場で、個人の語りを歴史と関連づけて理解すること、あるいは個人の語りから歴史を叙述することに言及しつつ、森報告、人見報告への疑問点をそれぞれ提示した。

つづく質疑応答ではフロアから、聞き取りの方法についての技術的問題（聞き取りにおけるトラウマの問題など）から口述資料をもちいた歴史叙述の困難性と可能性といった理論的・方法論的課題にまで多岐にわたる質問を得て、意見が交わされた。

（人見佐知子）

7. シンポジウム「戦争経験の継承とオーラルヒストリー——体験の非共有性はいかに乗り越えられるか——」

本年度の大会シンポジウムは、「戦争経験の継承とオーラルヒストリー——体験の非共有性はいかに乗り越えられるか——」と題し、遠藤美幸さん（神田外大）、小倉康嗣さん（立教大学）、田中雅一さん（京都大学）がそれぞれ報告をおこない、今野日出晴さん（岩手大学）から三報告へのコメントとともに、本シンポジウムの課題が明確に提示された。

遠藤報告は、ご自身が長らく携わってきた「勇会有志会」という戦友会を事例に、戦友の高齢化に伴うその活動の質的変容と世代交代から、戦場体験の継承をめぐる葛藤と可能性に関する厚い報告であった。2013年頃からの戦後世代の戦友会への参加は、一方では戦友会活動の継承と活性化の可能性を示唆したが、他方で戦争体験（遺志）の誤った継承の可能性を孕んでいた。そのことが戦争体験の解釈と継承に関する内部の葛藤を生み出し、戦友会は解散へと向かう。遠藤はこの過程を詳細に明らかとし、自身も非体験者の戦友会メンバーとして、戦友会における非体験者による戦争体験の継承の可能性について論じた。

小倉報告は、広島市立基町高校の生徒たちによる「原爆の絵」を描くという取り組みを事例とし、非

被爆者にとっての〈原爆という経験〉に関する感動的な報告であった。原爆の絵を描く過程で、生徒たちは体験者たちの証言（オーラルヒストリー）から彼らの「生」を受けとめ、ある種の「トラウマの感染」に悩まされつつも、相互コミュニケーションに基づく「原爆の絵」の作成過程で、体験の協同的な生成を経ていることを詳細に報告した。平和学習による体験の継承困難性が指摘されるなかで、基町高校による実践は、非被爆者による被爆体験の継承可能性を指し示す例としてその可能性について論じた。

田中報告は、アウシュヴィッツ博物館のガイドがホロコーストの生存者に会うことの意味を考察した深い報告であった。ホロコーストという20世紀最大の出来事を紹介するガイドへの関心は高いが、それを「ガイドたちの収容所跡や展示品と観光客たちへの態度」に着目し、感情労働という新たな視点からガイドをとらえたものであった。ガイドたちへのインタビューから、多くのガイドたちがホロコースト体験と向かい合うなかで、「心身の不調、霊視」といったものを経験しており、ガイドという活動が「トラウマの感染と紙一重のところ」にあり、「感染するか勇気をもらうのか」、ぎりぎりのところで過去に向き合い、未来へと進もうとすることを詳らかにした。

今野コメントは、これら三報告を見事に整理し、過去の戦争体験を深く学ぶことが当事者性を獲得するという屋嘉比収の論を援用しつつ、過去の体験の深部にある真実が私たちの現在に対して与える力に注目した。今野は、たとえば被爆者の生き方から学ぶことの重要性を「漂流」と「抵抗」という被爆者の生きる普遍的な思想と姿に触れることで、私たちが生きる力を得ることを指し示めた。

本シンポジウムのタイトルはオーラルヒストリーによる戦争経験の継承を考えるものであったが、それは体験者の生き方が私たちに与える影響の強さから、体験の非共有性を乗り越えられることが示されたシンポジウムであった。その一方で、グローバル化のなかでの市民社会の弱体化、ソーシャルメディアの影響力の増大が、オーラルヒストリー等による今後の戦争経験の継承にどのような影響を与えるかが課題として残された。

(蘭信三)

II. 総会報告

2017 年度総会（第 15 回総会）

日時：2017 年 9 月 3 日（日）12：05～13：00

場所：近畿大学東大阪キャンパス A 館 102 教室

会長挨拶、議長選出（人見佐知子会員）の後、以下の議案が諮られた。

第 1 号議案 2016 年度事業報告

2016 年度（2016.9.1～2017.8.31）事業報告について、以下の諸点が報告、了承された。

1. 会員数の現状

前回学会以降、2017 年 3 月末までの新規入会者は 23 名（一般 11 名、学生他 12 名）。3 年間の学会費未納による自動退会者、自己申告退会もあった。4 月以降の入会は、10 名（一般 4 名、学生他 6 名）あった。8 月 31 日現在の会員は 268 名（前回 255 名）である。これは昨年同時期と比べ 13 名増加である。

2. 第 14 回大会（JOHA14）の実施と第 15 回大会（JOHA15）の開催

第 14 回大会は、2016 年 9 月 3～4 日の二日間にわたって一橋大学佐野書院（東京都国立市：開催校一橋大学）で開催した。自由報告は 4 つの分科会に分かれ 16 本が報告され、一般報告他、第 4 部会ではテーマセッション「満洲の記憶」とオーラルヒストリーが開催された。また大会初日には、研究実践交流会「保苺記念シンポジウム—いまあらためて「保苺実の世界」を探る」を、大会二日目には、シンポジウム「日本軍「慰安婦」問題とオーラルヒストリー研究の／への挑戦」を開催した。開催校によると 2 日間でおおよそ 100 名以上が参加。特に 2 日目のシンポジウムでは会員外の方が多く参加し、関心の高さをうかがわせた。第 15 回大会は、2017 年 9 月 2～3 日の二日間、近畿大学で開催する。

3. シンポジウムの開催

2017 年 3 月 11 日に上智大学（東京）において、シンポジウム「エゴ・ドキュメント／パーソナル・ナラティブをめぐる歴史学と社会学の対話」を行った。報告は長谷川貴彦氏、朴沙羅氏、コメントが、好井裕明氏、司会が大門正克氏で行われ活発な議論が展開された。

4. 学会誌 12 号の発行と 13 号の編集・発行

2016 年 9 月に学会誌第 12 号を発行し、学会大会時に会費納入済会員の参加者へ配布し、不参加者や後日納入者にはインターブックス社から配送した。13 号の編集作業は順調に進み、例年通りの発行を予定している。なお今年度より学会時における配布はとりやめ、各会員には 9 月中にインターブックス社より配送を予定している。

5. ニュースレターの発行

ニュースレターは第 14 回大会後、第 15 回大会の間に、31 号（2016 年 12 月 22 日）と 32 号（2017 年 8 月 1 日）を発行した。広報委員 2 名が編集分担した。会員メーリングリストでの配信を行った。

6. ウェブサイトの充実

ウェブサイト（<http://joha.jp/>）を学会事務局と広報委員会が管理運営している。

7. 会員相互の交流の促進

会員メーリングリストを通じた会員相互の情報発信が適宜なされている。

8. 学協会誌の電子化事業

学協会誌の電子図書館事業が2016年度に終了となることに対して、本学会では、2017年よりJ-STAGEへ参加をすることとした。すでに手続きは終了し、今後徐々に掲載される予定である。なおインターブックス社に業務を委託している。

第2号議案 2016年度決算報告

2016年度(2016.4.1～2017.3.31)決算報告資料に基づき報告され、了承された。

第3号議案 2016年度会計監査報告

塚田守監事と小倉康嗣監事より「会計帳簿、預貯金通帳、関係書類一切につき監査しましたところ、正確で適切であることを認めましたので、ここに報告いたします」と報告があり、了承された。

第4号議案 2017年度事業案

2017年度(2017.9.1～2018.8.31)事業案について、以下の諸点が報告、了承された。

1. 会員の拡大と維持

年次大会やシンポジウムなどの実施を確実にを行い、これらの情報を広報することで、本学会の周知に努め、会員数の拡大を目指す。会員の維持と会費収入確保のため、大会後、年内を目途に郵送による入金状況確認を行い、会費納入の督促を行うと同時に未納退会者を防ぐようにする。

2. 第15回(JOHA15)大会の実施と第16回大会(JOHA16)の準備

第15回大会を2017年9月2～3日の二日間にわたって近畿大学(大阪府東大阪市)において開催する。自由報告は4つの分科会に分かれ、14本の報告を予定している。本年度は研究交流実践会として「世代をつなぐ聞き取り ～オーラル・ヒストリーの可能性～」(9月2日開催)、シンポジウムとして「戦争経験の継承とオーラル・ヒストリー:「体験の非共有性」はいかに乗り越えられるか」(9月3日開催)を予定。広報活動として学会HPに掲載し、学会理事を中心に広報に努めている。来年度の第16回大会については2018年秋に二日間、東京家政大学での開催を予定。

3. 学会誌第14号の発行

学会誌第14号は、第8期理事会の編集委員会によって、JOHA15のシンポジウムと自由投稿をもとにして編集する方針である。また第8期より非理事の編集委員を4名選定し編集委員会をたちあげ、学会誌の査読体制などの充実を図っていく予定である。本年度も電子メール添付での応募を可能にする方針である。

4. 研究会・ワークショップの開催

研究会・ワークショップは、2018年3月に実施予定。内容は第8期の研究活動委員によって決定予定。

5. ニュースレターの発行

JOHA15後に大会報告を中心にしたニュースレター第33号を、JOHA16前に大会プログラムを中心にした第34号の発行を予定している。

6. ウェブ情報の充実と改善

学会ホームページをさらに見やすく整備するとともに、適宜更新していく。

7. 会員相互の交流促進

学会 HP や会員メーリングリストの活用、ニューズレター配信を通じて、会員相互の交流を促進する。また、会員の出版、活動情報についても学会誌での書評等を通じて積極的に共有する。

8. 海外のオーラル・ヒストリー団体との交流

理事および関心ある会員を中心に、海外のオーラル・ヒストリー団体との交流を促進し、会員に情報提供を行う。

9. 学協会誌の電子化事業

J-STAGE への移行作業を速やかに完了させる。

第5号議案 2017年度予算案

2017年度（2017.4.1～2018.3.31）の予算案資料に基づき提案され、了承された。

第6号議案 理事選挙結果報告

「学会会則」第6条3項（理事の選出は年会費を払った正会員の選挙による。選挙規程に関しては、別に定める）および「理事選挙規程」に則り、2017/2019（第8期）理事を選出する選挙を実施した。

2017年6月10日、日本大学にて選挙管理委員会を開催し、2017/2019（第8期）理事選挙（5月14日必着）の開票作業を行いました。投票状況は以下の通りである。

郵送による投票総数：59枚

白票による無効投票：2枚+1票

被選挙権該当者以外への投票による無効投票：7票

3名以内連記の有効投票総数：163票

選挙管理委員会では、会員投票による選出理事の確定が目的である。選挙結果に基づき、選出理事（上位8名）を6月25日（上智大学）に招集し、欠席者を除く5名によって理事の選定を行った。その結果、2017/2019（第8期）理事会構成案が総会で提案された。以下に、関連規定。

参考：日本オーラル・ヒストリー学会理事選挙規程（抄）

1. 理事会の構成

日本オーラル・ヒストリー学会の理事会は、会員による投票で選出される8名と、投票によって選出された理事による推薦選出者7名以内の15名以内で構成され、選挙年度の総会において承認を得るものとする。

5. 選挙管理委員会

選挙管理委員会は事務局長および事務局長が指名する正会員2名で構成される。

7. 投票による選出理事の役割

投票によって当選した8名の次期理事は、次期会長候補者を互選し、また残り7名以内の理事候補を投票結果を参考にしながら、選出する。

以上

第7号議案 第8期理事会の承認

理事選挙結果に基づき、選出理事（出席5名）を6月25日（上智大学）に招集し、以下のとおり理事会のメンバーを選出した結果、承認された（五十音順）。

蘭信三、石川良子、上田貴子、大門正克、北村毅、倉石一郎、佐々木てる、佐藤量、田中雅一、中村英代、根本雅也、橋本みゆき、人見佐知子、矢吹康夫、山田富秋、以上15名

以下に関連規定。

参考：日本オーラル・ヒストリー学会理事選挙規程（抄）

8. 理事会、事務局の構成

投票と推薦選出によって決まった15名以内の理事によって、事務局と次期理事会が構成される。

9. 選挙年度の総会において、次期会長と理事が決定される。

理事会構成員の互選の結果、以下の理事会構成案を提案します。

2017/2019 第8期 JOHA 理事会

会長：蘭信三

事務局長：人見佐知子

会計：上田貴子

編集委員長：佐々木てる

編集委員：石川良子、大門正克、北村毅、山田富秋

研究活動委員長：田中雅一

研究活動委員：倉石一郎、佐藤量、根本雅也、橋本みゆき

広報委員長：矢吹康夫

広報委員：中村英代

監事：好井裕明、川又俊則

（第7期事務局長 佐々木てる）

Ⅲ. 理事会報告

1. 第7期、第8期 合同理事会 議事録

日時：2017年9月2日（土）11:00～12:00

場所：近畿大学

出席者：有末賢、佐々木てる、中村英代、蘭信三、大門正克、岩崎美智子、小林多寿子、佐藤量、赤嶺淳、好井裕明、人見佐知子、上田貴子、山田富秋、田中雅一、倉石一郎、橋本みゆき、石川良子、矢吹康夫、北村毅（順不同）

欠席者：桜井厚、八木良広、平井和子、根本雅也

議事録作成者：人見佐知子

第7期 第7回理事会

1 議事録記載者確認および前回の議事録確認

記載者：人見

前回の議事録：メールで事前送付の議事録について疑義のないことが確認された。

2 会長より

第15回大会の開催についての謝意とともに、2年間の「歴史研究にとってのオーラル・ヒストリー」についての研究成果についても述べられた。また、近年の学会の運営体制、選挙のあり方（委員の4年交代制）などがうまく機能していること、このかたちでの継続が望ましいとの意見が述べられた。

3 編集委員会

(1) 13号について

・前回の理事会で、大会での学会誌配付の取りやめにともない、あらためてスケジュールの確認がなされた。8月4日に最終校正を終えたこと、印刷の日程は未定であるが、9月末に発送予定であることが報告された。13号の価格についても確認された（2,200円税別）。

・編集作業について、13号から紙媒体での投稿を取りやめ、校正をPDFで行うことで、作業量が減ったことが報告された。

・内容については、特集の充実の一方で、掲載に至らなかった投稿論文が多かったことについて、前回の理事会でも話題となった「オーラル・ヒストリー研究とは何か」といった議論の必要性が再度喚起された。

・次期編集委員会での検討事項として、投稿から査読にいたるスケジュールの見直しが要請された。

・書評論文の項目新設について、周知の必要が提起された。

(2) J-Stage への移行作業について

・1年後の論文無料ダウンロードに関連して、学会員であることのメリット（投稿する権利）について確認がなされた。

・機関リポジトリとの関連についての問題提起があり、次期理事会・委員会での継続審議事項とすることが確認された。

4 研究活動委員会

(1)研究成果の公表について

- ・公開シンポジウムや大会でのシンポジウムなどの企画の増加にともなって、その成果をどの媒体に公表するかという問題が生じている点について提起があった。
- ・昨年度の JOHA 大会における 2 日目のシンポジウムについては、岩波書店から出版予定（12月）であることが報告された。
- ・2017年3月11日の公開シンポジウムについては、上智大学の紀要に掲載予定であることが報告された。
- ・今年度の大会におけるシンポジウム等の成果掲載については、編集委員会との調整が必要である。
- ・学会誌以外の媒体にシンポジウム等の成果を掲載する場合、会員にどのように周知・宣伝するかを考えるべきことが提起された。

(2)2018年度大会について

- ・岩崎美智子先生（東京家政大学）に開催校理事として1年間理事にくわわっていただくことが提起され、承認された。
- この点に関連して、岩崎先生は前期、前々期につづく第3期目の理事就任となることが、規則上問題がないかどうか、議論となった。佐々木事務局長より、選挙管理委員会の規定上問題はない（総会資料には理事として名前は出ない）旨の発言があり、問題がないと判断された。小林理事より、開催校理事は、理事とは別枠として附則をつけてはどうかという提案があった。
- ・岩崎美智子先生から、大会開催については大学事務局から内諾を得ているものの、正式な手続きは3月以降となる旨について説明があり、現時点では開催予定ということをお願いしたい、という件もふくめて挨拶があった。
 - ・また、東京家政大学は小規模校であるが、都心からのアクセスがよいこと、都内の院生に大会運営補助をお願いする予定であることなどが伝えられた。

5 広報委員会

- ・ニューズレター32号を8月1日に発行したことが報告された。
- ・今期大会のポスター作成についても報告があった。

6 会計

- ・会員増などによる繰越金の増加分について、理事の交通費支給などに充てたことが報告された。また、学会のために繰越金を有効活用する方針が確認された。

7 事務局

- ・新規入会希望者5名について、入会が承認された。
- ・総会の進行について、確認があった。

第8期 第1回理事会

1 新会長の挨拶

蘭新会長より挨拶があった。これまでの JOHA 大会の蓄積をどのように引き継いでいくか、研究活動の共通課題については研究活動委員会と協議をかさねていくべきこと、そのさい歴史学、社会学にくわえて人類学のメンバーの増加をふまえて学際的に研究活動をひろげていくことなどについて展望が述べ

られた。

2 新理事の紹介、委員会の確認

・新理事よりそれぞれ挨拶があった。

3 各委員会より

(1)編集委員会

・これまで理事4、5名の体制であったが、査読の充実などのため10名体制での編集委員会をたちあげたいことが提案され、承認された。

・3月末の投稿締め切り後第1回編集委員会開催を予定。体制作りもふくめて、編集委員会をスタートさせることを確認した。

(2)研究活動委員会

・平井和子研究活動委員について。次期理事就任を予定していたが、理事定員15名のところ、16名を選出してしまったことから、平井先生には研究活動委員として研究活動にかかわっていただくことについて提案があり、承認された。

※なお、理事以外のメンバーを委員とすることについて、慎重な意見もあった。委員会活動と理事会との意思疎通を綿密にすることが確認された。

・平井委員の理事会出席のさいの交通費については、次期理事会での検討事項となった。

・交通費の支給については、他の理事も含めて検討事項（現在は半額支給であるが、若手理事が多いことから全額支給が望ましいことなど）であることが確認された。会計と事務局で検討して、メールであるいは次回理事会で提案してほしいと新会長より要請があった。

2. 第8期第2回理事会 議事録

日時：2017年12月3日（日）13:00～15:45

場所：上智大学2号館6階615a室

出席：蘭信三、人見佐知子、上田貴子、田中雅一、倉石一郎、橋本みゆき、根本雅也、佐々木てる、石川良子、佐藤量、大門正克、中村英代、矢吹康夫、岩崎美智子（順不同）

欠席：北村毅、山田富秋

議事録作成者：佐藤量

議題

1. 前回議事録・議事録記載者確認

異議なく、承認された。

2. 編集委員会報告

佐々木編集委員長より、次号14号に向けての現況報告があった。次号の原稿締切が3月末であるため、原稿が出そろった4月上旬に次回の編集委員会議を開催予定であること、また、現在までに書評依頼が3冊来ていることが報告された。

また、蘭会長より質問があった、近畿大学で行われた2016年度大会の3特集（本シンポ、研究交流実践会、「戦争と子ども」シンポ）の原稿の掲載方針については、今後編集委員会で審議されることとなった。

3. 研究活動委員会報告

田中研究活動委員長より、今後の研究企画案について報告され、審議を行った。企画案は大きく3点あり、①2018年9月の大会シンポ、②2018年3月予定のシンポ、③実践ワークショップ企画である。

① 2018年9月の大会シンポについては、企画立案された倉石理事より「食のオーラルヒストリー」をテーマとすることが報告され、承認された。これまでは、戦争、原爆、植民地支配といった「歴史」がテーマに取り上げられることが多かったが、今回は「食」という日常生活に着目したシンポを企画した。報告者案としては、赤嶺淳氏（一橋大学・人類学）、伊地知紀子氏（大阪市立大学・社会学）、武田尚子氏（早稲田大学・社会学）、コメンテーターとして藤原辰史氏（京都大学・歴史学）らを検討中であることが報告された。今後研活にて報告者・コメンテーターへの依頼を進めていく。

② 2018年3月予定のシンポ案「オーラルヒストリーとアーカイブ」について、企画立案された蘭会長から報告された。聞き取り調査のテープやビデオなどのオーラルデータについて、今後どのようにアーカイブ化し共有していくかをテーマとしたシンポを企画した。報告者案として、小林多寿子氏（一橋大学・社会学）、安岡健一氏（大阪大学・歴史学）らを検討している旨報告があった。

ただし、3月シンポ以降この企画をどのように運営していくかについては、研活委員会でも審議中であり、任期のある研活マターで動くのは困難であることや、JOHAとして作業部会を作る案など、研活委員会でも様々な意見が出ていることも合わせて報告された。

田中委員長からは、本企画は規模の大きなものであるため、経費についても問題になってくるが、例えば科研の研究成果促進費のなかのデータベースに関する採用枠があるため、これに応募する方法もあることが提案された。ただし、実際に応募するとすると、2018年10月に申請、2019年4月採択になるため、今次の理事会の作業としては申請の準備が中心になる。そのため理事会としての活動よりは、作業部会を立ち上げて長期的に事業化する案も示された。

各理事からは、次の理事会にかかわる問題でもあるため慎重に議論する必要があることや、個人情報など法的な問題をどのようにクリアするかなどの発言があった。これらの意見を踏まえて、3月シンポの内容も含めて、今後継続審議とすることが確認された。

③ 実践ワークショップ企画として、企画立案された橋本理事より報告があった。本企画は、伊地知紀子氏（大阪市立大学・社会学）の著書『消されたマッコリ。』（社会評論社、2015年）の舞台となった大阪府泉南郡岬町多奈川地域を、著者である伊地知氏とともに歩くフィールドワーク&ワークショップとして提案された。本企画は、2010年に酒井順子さんがJOHAで実施されていた連続ワークショップのような、オーラルヒストリーの実践の共有や意見交換の場となることが構想されている。開催時期は、2018年5月ころを予定している。今後研活委員会および伊地知氏との協議を重ねながらタイムスケジュールを決定していく旨報告された。

4. 広報委員会報告

矢吹広報委員長より、次号ニューズレターの進捗状況が報告された。また矢吹委員長から、2017年12

月中に 3 月企画の案内を次号**ニューズレター**に載せられるかどうかの確認があり、それに対して蘭会長から載せる方向で作業を進める旨回答があった。

5. 会計

会計の上田理事から、以下の 3 点について会計報告があった。

- ① 学会会則における事務局の所在地を、現会計の上田理事の所在地に変更された旨報告があった。なお学会会則はホームページに掲載されるが、そこに個人情報載せないことが確認された。また、次回の大会総会における学会会則の変更報告については、修正項目だけを報告することが確認された。
- ② 閉鎖された公共図書館の継続図書館への寄贈については、寄贈停止とすることが承認された。
- ③ 年 2 回の理事会参加にかかる交通費の支払いについては、年に延べ 1 回分（上限 1 回）を交通費として支払うことが承認された。

6. 事務局報告

事務局の人見理事より、2 点報告があった。

- ① 新入会員が 7 名あり、入会が承認された。
- ② 問い合わせのあった賛助会員（機関会員）については、今回は会員になることを見合わせる旨連絡があったことが報告された。賛助会員の位置づけについては、継続審議とすることが確認された。

7. 次回理事会の日程

2018 年度大会は、2018 年 9 月 1 日、2 日に東京家政大学（板橋キャンパス）で開催されることが確認された。また、次回理事会は、2018 年 6 月 16 日（土）13:30 より、上智大学で開催されることも決定した。

IV. お知らせ

1. シンポジウム「オーラルヒストリーのアーカイブ化を目指して」開催のお知らせ

■趣旨

オーラルヒストリーのアーカイブ化・コレクション化は、英米では1980年代から始まっている。日本でも、東京外国語大学21世紀COEプログラム『史資料ハブ地域文化研究拠点』の「オーラル・アーカイブ班」においてオーラル資料の蓄積が試みられ、政策研究大学院大学では、聞き取られた多数の「公人のオーラルヒストリー」がデータベース化されている。また、大阪社会運動協会では主に1980年代に聞き取られた労働運動家へのオーラルヒストリーが、2015年末にウェブサイト上に公開された。

日本におけるオーラルヒストリーのアーカイブ化にむけては、日本民俗学会2010年国際シンポジウム「オーラルヒストリーと「語り」のアーカイブ化に向けて」において、民俗学、文化人類学、社会学、歴史学を横断する学際的で画期的な取り組みがなされた。しかし、「公的な仕組みづくり」は依然として課題のままである。移民研究や地域女性史などでオーラルヒストリーに取り組んできた人たちから、「研究室（や自宅）の貴重なテープをこのまま眠らせるのはもったいない。所蔵・活用が出来るような公的な仕組みをつくってほしい」という声を聞くことが少なくない。

しかも、近年のアーカイブ学の展開は目覚ましい。たとえば、2008年に学習院大学大学院にアーカイブズ学専攻が開設され、2016年には次世代デジタルアーカイブ研究会がアーキビストを中心に立ち上げられ、2017年5月には全国学会であるデジタル・アーカイブ学会が設立され、本格的な資料のデジタル化、アーカイブ化が動きだしている。

このように資料のデジタル・アーカイブ化が急速に進むいまこそ、オーラルヒストリーのデジタル・アーカイブ化(OHDA)に取り組むべき時が来たかと思われる。日本におけるOHDAの「公的な仕組み」づくりにむけ、まずは第一弾として、現状認識と問題提起のシンポジウムを開催したい。

オーラルヒストリーのアーカイブ化に造詣の深い社会学者、歴史学者、移民研究者、アーキビストに登壇してもらい、その公的な仕組みの可能性と課題について論じたい。JOHAだけでなく、日本移民学会、総合女性史学会等々の関連学会、さらには公立図書館とも連携し、領域横断的な取り組みとなることを期待されよう。

■日時 2018年3月17日(土) 13時30分～17時30分

■会場 上智大学

■モデレータ・司会 蘭 信三(上智大学)

■登壇者

- 小林多寿子氏(一橋大学・社会学)
- 安岡健一氏(大阪大学・歴史学)
- 森本豊富氏(早稲田大学・移民研究)
- 宮崎黎子氏(地域女性史研究会・女性史研究)
- 福島幸宏(京都府立図書館・アーカイブ学)

(蘭信三)

2. 『日本オーラル・ヒストリー研究』 第14号 原稿募集

論文、研究ノート、聞き書き資料、書評、書籍紹介の原稿を募集いたします。投稿希望者は『日本オーラル・ヒストリー研究』第13号の投稿規定・執筆要領を参照の上、以下の編集委員会メールアドレスまで原稿をご送付ください。図版の著作権をはじめ、図版の文字換算など、12号以降は執筆要領の変更が多々ありますので、ご注意ください。

- 提出原稿は、査読審査を経たのち、6月中旬ごろに掲載の可否が決定します。
- 12号より原稿の提出は、メール添付で受け付けることとなりました。以下のアドレスにご送付ください。学会大会で発表されたみなさんをはじめ、会員のみならずからの投稿をお待ちしています。投稿に関し、質問があれば、お気軽に以下の問い合わせ先にお訊ねください。
- 募集期間：2018年3月20日～31日(厳守は従来通りですが、メールによる事故を防ぐため、募集期間を設けます。ご協力ください)。
- 問合せ・応募原稿送付先：joha_journal(at)ml.rikkyo.ac.jp

(編集委員長 佐々木てる)

3. 会員異動 (2017年6月27日～2017年12月3日)

(1)新入会員 (入会順)

村上満子	沖縄県立看護大学
西村秀樹	近畿大学
川上幸之助	倉敷芸術科学大学
小野寺真人	京都府立大学
謝花直美	沖縄タイムズ
鈴木貴宇	東邦大学
西井麻里奈	大阪大学大学院
豊田徳章	日本映画監督協会会員
中村春菜	沖縄県教育庁文化財課
原口和子	自営業
秋山剛	長野県看護大学
湯川真樹江	学習院大学

(2)退会

なし

*連絡先(住所・電話番号・E-mailアドレス)を変更された場合は、できるだけ速やかに事務局までご連絡ください。

(事務局長 人見佐知子)

4. 2017年度（2017年4月1日～2018年3月31日）会費納入のお願い

平素は、学会運営へのご協力をありがとうございます。

本学会は会員のみなさまの会費で成り立っております。今年度の会費が未納の方におかれましては、ご入金のごほうじょをお願いいたします。

会費は8月末日までのご納入していただきたい旨、お願いしておりましたが、まだ未納の会員さまがいらっしゃいます。学会誌は一斉発送の時期を過ぎておりますので、ご納入確認がとれた後に、個別にお送りさせていただきます。

また、一部ですが2016年度分、2015年度分についても未納の会員さまがいらっしゃいます。こちらでも早めのご納入をよろしくをお願いいたします。

■年会費

一般会員：5000円 学生・その他会員：3000円

*「学生・その他会員」の「その他」には、年収200万円以内の方が該当します。区分を変更される場合は、会費納入時に払込票等にその旨明記してください。

*年会費には学会誌代が含まれています。

■ゆうちょ銀行からの振込先

口座名：日本オーラル・ヒストリー学会

口座番号：00150-6-353335

*払込取扱票（ゆうちょ銀行の青色の振込用紙）の通信欄には住所・氏名を忘れずにご記入ください。

*従来の記号・番号は変わりありません。

■ゆうちょ銀行以外の金融機関から振り込む際の口座情報

銀行名：ゆうちょ銀行

金融機関コード：9900

店番：019

店名（カナ）：〇一九店（ゼロイチキューウ店）

預金種目：当座

口座番号：0353335

カナ氏名：（受取人名）：ニホンオーラルヒストリーガツカイ

郵便払込・口座振込の控えで領収書に代えさせていただきますので、控えは必ず保管してください。必要に応じて、個別に領収書も発行させていただいておりますので、その際にご連絡下さい。その他、学会会計全般についてご質問等ございましたら、会計担当の上田（uedanota(at)kindai.ac.jp）までお問い合わせください。

（会計 上田貴子）

.....

日本オーラル・ヒストリー学会
Japan Oral History Association (JOHA)

JOHAニューズレター第33号

2018年1月**日

編集発行：日本オーラル・ヒストリー学会

JOHA 事務局

〒501-1193 岐阜市柳戸1-1

岐阜大学地域科学部 人見佐知子研究室

日本オーラル・ヒストリー学会事務局

E-mail joha.secretariat(at)ml.rikkyo.ac.jp

* 郵送またはメールでのご連絡をお願いいたします。
